

警固祭りにおける鉄砲隊について

—長久手市岩作のオマントを中心に—

川出康博

愛知県長久手市では、毎年 10 月 2 週目の日曜日に警固祭りが開催されている。長久手市で学芸員として勤務するようになり、初めてこの祭りを見学した。標具(ダシ)とよばれる馬具で着飾られている馬が地域を練り歩き、馬付とよばれる人と共に神社内を疾走した。そして、地域を練り歩きつつ、道中で 100 人近い鉄砲隊が火縄銃を発砲(空砲)する。長久手市の警固祭りの鉄砲隊は各人が各家で保管している言わば「マイ火縄銃」で参加している。生活環境が変化し、都市化していく中で、都市部でこのような大規模な火縄銃の鉄砲隊による発砲が行われる祭礼は全国的にみても珍しく、何故このような大規模な鉄砲隊が組織されたのかについて検討を行う。

1 馬の塔の概要

馬の塔とは、かつて尾張、西三河で行われた代表的祭礼習俗のひとつで、標具(ダシ)と呼ばれる御幣や鏡などの依代を立て豪華な馬具で飾った馬を曳いて社寺へ奉獻するものである。「馬の頭」とも書き、オマント、オマントウとも呼ばれ、馬を担当した頭人(馬頭人)からきた言葉¹。競馬の式が起源ともいわれているが、収穫感謝や雨乞いのためにも献馬奉納が行われているため、古来から行われている献馬奉納との関連も指摘されている。

馬の塔には、その地区の氏神に奉納する祭と近隣の村々が連合(合宿、合属とも)して大きな社寺に奉納する祭のふたつがある。

①種類

先行研究により、馬の塔は「だし馬オマント」、「走り馬オマント」、「警固オマント」の 3 種に区分されている²。

¹ 『都道府県別祭礼事典』愛知県祭礼研究会 1991 年

² 『馬の塔』尾張旭市教育委員会 1984 年

ア、だし馬オマント：駆馬を行わずだし(標具)で飾り立てる馬を奉納するもの。

イ、走り馬オマント：駆馬を奉納する神事をともなうもの。

ウ、警固オマント：棒の手や鉄砲隊の警固がともなうもの。

但し、複数の要素を併せ持つ場合があるが、どの要素が強いかで決まる。

今回主題とする鉄砲隊が警固するのはウの警固オマントのみ。

②歴史

馬の塔に関する最古の記録は明応 2(1493)年に豊田市にある猿投神社への献馬奉納の記録である。日進市岩崎区が所有する「猿投祭祭禮記録」には、天文 22(1553)年から慶長 19(1614)年までの猿投神社への献馬奉納の記録があり、天文 22 年から鉄砲の使用が記録されている。長久手市域の村の参加は同記録に慶長 8(1603)年に北熊、大草、前熊、岩作の村々が猿投神社に献馬奉納に行つたと記されている。

→鉄砲隊が参加する警固祭りは 400 年以上前から続いており、鉄砲伝来からほどなくして祭りで鉄砲が使用されている。

2 愛知県内の鉄砲隊の発砲について

1 で見たようにすべての警固祭りで鉄砲隊が参加するわけではない。また、安田修氏によって、地区により鉄砲隊の人数に大きな差がある事が既に指摘されている。先行研究の調査された人数に喫緊の人数を追加し、表にまとめた。

コロナ禍や様々な事情を経て、多くの地区で鉄砲隊の人数が減少してきているが、今でも 1 地区で 100 人を超す鉄砲隊が参加しているのは長久手市の岩作と長湫地区のみであった。

3 岩作地区の警固祭りについて

コロナ禍以前の 2018 年の写真をもとに、岩作地区の警固祭りの様子を確認する。

①垢離取り→②東西 2 か所でそれぞれ練り歩く→③道中での火縄銃の発砲→④東西合流→⑤献馬奉納→⑥棒の手の奉納→⑦東西各馬宿へ

火縄銃や衣装は各自で自宅に保管しているが、それ以外の馬道具類は石作神社で保管され、毎年 8 月に虫干しを行っている。寛政 7 年(1795 年)の箱に収められた『尾張年中行事絵抄』に記録されている矢の標具も現存している。

4 岩作地区での鉄砲隊について

近年、すべての警固祭りで鉄砲隊の人数が減少しているが、長久手市域の岩作、長湫の 2 地区の鉄砲隊の人数は 100 人以上と他地域に比べて、際立って多い。その中で岩作は文政 13(1830)年の警固祭りで 120 人の鉄砲隊が参加している事が記録されている³。これに対して、『尾張藩の政治的な配慮とも考えられるが、これとて推測に過ぎず、現在も謎のままである』⁴とある。さらに『①岩作は旧山田郡石田郷として発祥が古く、附近一帯の中心地であった。②仏ヶ根の戦い(発表者註：小牧・長久手の戦いの合戦のひとつ。)にも鉄砲は多く使用されてその戦後処理は多くの岩作郷人によって為され、その時多くの郷人が鉄砲を所持した。③石作神社は往古武人の神であり岩作の警固祭りには古い時代より鉄砲を奉納して来たことにより、後世江戸時代中期以降尾張藩に至っても奉納神事として許したもの。④藩が平時から農民に武装させ、緊急時には藩の命令に従った兵として使うためではないか。』と確実な資料もなく不明ではあるが参考となる理由を挙げている⁵。

そもそも、刀狩り以降農民が鉄砲を持つ事は基本的に禁止されていた。例外的に所持を認められていたのは用心鉄砲、威鉄砲(ともに盗賊対策としての自衛及び脅し用の火縄銃)、獵師鉄砲の三種類のみ⁶。そのような状況で 120 挺もの火縄銃を調達することができたのだろうか。

今回、今回新たに長久手市郷土資料室が所蔵している資料の中から、岩作村の猿投祭に

³ 「尾張年中行事絵抄」(『名古屋叢書 3 編第 6 巻』) 名古屋市蓬左文庫 名古屋市教育委員会 1988 年

⁴ 註 2 に同じ

⁵ 『昭和 57 年度調査研究報告書』 長久手町教育委員会、長久手町郷土史研究委員会 1982 年

⁶ 安田修「愛知県下における秋祭りと鉄砲について」(『もりやま第 19 号』1995 年)

関する 9 点の資料を確認した。明治時代の岩作村の猿投祭の名簿には明治 15 年以降鉄砲隊が記されていない。長久手市教育委員会が現在の第 7 分会から一括して寄附を受けたため、鉄砲隊がないのが下島に限った可能性も否定できない。

また、年ごとに祭礼の役名が変わっている事もあり、警固役に鉄砲隊が含まれている可能性も否定できない。また、鉄砲隊がない事については、岩作だけでなく愛知県全域での火縄銃を使用する祭についての統制や日清・日露戦争など岩作村だけでなく、対外的要因も想定される。それが大正 6 年になり、全部で 7 つの分会のあるうちの 1 分会だけで 59 人も鉄砲隊が参加している。

岩作村の氏神である石作神社の倉庫にも昭和初期の祭礼警固名簿を 2 点発見した。先述したように昭和には、猿投神社に合同で献馬奉納を行う合宿は行われなくなった。そのためなのか、江戸時代や明治時代には、氏神祭礼ではなかった鉄砲隊の参加が確認できる。

おわりに

今回の調査で、祭りに参加したすべての分会の資料を見つける事はできなかったが、『尾張年中行事絵抄』を除いて、江戸時代に岩作村の鉄砲隊の人数が 100 人を超える事が想定される資料は確認できなかった。

しかし、大正、昭和初期になると、100 人を超す鉄砲隊も想像できてくる。現在、行われているような大規模な鉄砲隊が恒常的に組織されるようになるのは、近代以降の比較的新しい時代に尾張藩所持していた火縄銃が流通する等して以降ではないかと推測する。

参考文献

自治体史及び自治体編纂

『愛知の民俗芸能 愛知県文化財調査報告書第 55 集 昭和 61～63 年度 愛知県民俗芸能総合調査報告書』 愛知県教育委員会 1989 年

『長久手町史 資料編 4』 長久手町史編さん委員会 1990 年

「長湫の警固祭」(『愛知県史民俗調査報告書 5 犬山・尾張東部』) 加藤慈都 2002 年

『愛知県史 別編民俗 2』 愛知県史編さん委員会 2008 年

『日進市史 民俗編』日進市史編集委員会編 2015 年

『瀬戸市の警固祭り』 瀬戸市文化遺産活用実行委員会 2018 年

展覧会図録

『部門展 馬の塔と棒の手』名古屋市博物館 1981 年

『長久手の馬の塔と棒の手』長久手町教育委員会 1987 年

『長久手合戦／棒の手・オマント・警固祭り』長久手町教育委員会 2005 年

『桜井町の棒の手・馬の塔』安城市歴史博物館 2012 年

その他

「猿猴庵日記」(『名古屋叢書 [正編] 第 17 巻』) 名古屋市教育委員会 愛知県郷土資料刊行会 1983 年

「愛知の祭礼習俗 馬の塔の諸相」(『名古屋市博物館研究紀要第 6 巻』) 田中青樹 名古屋市博物館 1983 年

小林幸夫「馬の頭の風流：祭礼と見世物と」(『紀要』28 号) 東海学園大学 1993 年

松下 孜「近世知多地方における雨乞い行事」(『日本福祉大学子ども発達学論集 第 3 号』) 2011 年